Yotte rasshai mite rasshai

Jozaisan hondoji no jiho dayo

2024.02.01 Winter

令和6年2月1日

冬

vol. 05

Jozaisan Hondoji public relations

常在

jozai ryoju sen

霊鷲山

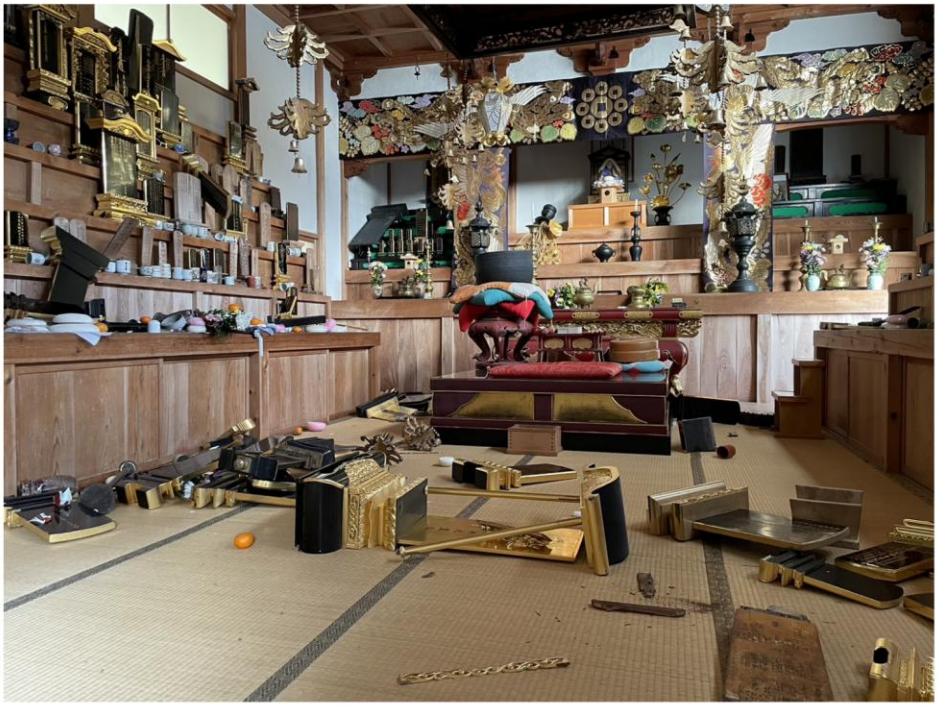
常在山
本土寺
季刊寺報

Hondoji yoi tera ikitai otera sonnna kimochi ni kitto nareru issatsu wo anata ni otodoke itashi masu

【右】崩落した十六重の石塔。
【上】仏具が散乱した本堂内陣。
【下】激しい揺れにより多数の位牌が落下した。
【左】地震発生時刻を指したまま止まった時計。

令和六年
能登半島地震

あの日、
能登半島が「震動」した。



元旦の能登半島を襲った未曾有の大震災から一カ月が経ちます。小規模ですが、いまだに余震が絶えず「ズズン…」という地響きと建物が軋む音を耳にするたびに、あの日の揺れを思い出して背筋が冷たくなります。

あの日―今年の一月一日は、冬の北陸とは思えないような晴天に恵まれた、穏やかで暖かな日でした。お正月ぐらいは、こたつに籠ってのんびりとお休みを満喫したいものですが、残念ながらお寺にいると、そうは問屋が卸してくれません…。今年の元旦も、慌ただしく大晦日を終えたばかりの眠い目を擦りながら、午前中は事務仕事や、翌日から始まる予定だった「春祈祷」の準備に取り組み、午後からは今年最初となる朔日参りを勤修し、参詣の方々と一緒に一か月間の無事平穏を祈念しました。

そうして、今年最初の任務が一通り終わって、ホッとしていたのも束の間。運命の午後四時六分、緊急地震速報のアラームが鳴り響くのとほぼ同時に最初の揺れが到達しました。

珠洲市を震源とする最大震度五強の第一波は、中能登町では震度三を観測する程度だったので、その時点では「いつもの散発的な地震かな？」と高を括っていました。

しかし、その予想は「ズドン」という大きな衝撃と共に脆くも崩れ去りました。時刻は午後四時一〇分。志賀町を震源とする最大震度七の地震は、震度三程度ではビクともしない当山の建物を、さながら悪路を走っている自動車の車内のようにガタガタと激しく揺らしました。情けない話ですが、生まれてこのかた経験したことのないような、尋常ならざる激しい揺れ方と、建物が「ギシギシ」と聞いたことの無い音を出して軋む様子に、私は完全に腰を抜かしてしまい、外に避難することも出来ないまま床に這いつくばっていました。

揺れ始めてから一分近くが経った頃でしょうか。なおも揺れが続く中、ハッと我に返った瞬間、真っ先に脳裏をよぎったのは今年で築一七七年になる本堂と、安置しているほとけさまの御尊像でした。「火事場の馬鹿力」とは言いますが、つい先程まで腰を抜かしていたのが嘘のように、揺れる庫裏を本堂めがけて一直線に駆け抜けました。

堂内に着いてまず目に入ったのが、前後左右に振り子のように大きく揺れる天蓋（てんがい）と瓔珞（ようらく）。一瞬、夢でも見ているのかと思いましたが、「このままでは落下してしまう！」と、咄嗟に瓔珞にすがり付き動かないよう必死に抑えました。

なおも続く大きな揺れの中、「本堂倒壊」という言葉が頭をよぎり、最悪の事態を覚悟しました。

二分近く揺れていたでしょうか。ようやく揺れが収まったのを見計らって堂内を確認すると、燭台や香炉、花瓶、木蓮華など、高さのあるものはことごとく倒れていましたが、建物の方はなんとか持ちこたえてくれました。

位牌堂に走ると、こちらも建物は無事でしたが、大きな位牌を中心に倒れ、段から落下しており、多数の位牌が畳に散乱し、足の踏み場もない状態でした。その後、急いで諸堂の被害状況を確認しましたが、白壁の一部崩落や亀

裂が確認されたものの、幸いなことに柱や床板に異常はありませんでした。約五十体あるほとけさまの御尊像は、十羅刹女像が一体倒れてしまい（＝無傷）、開基上人（祐乗上人）像の胴体部と左腕の接合部が外れてしまっていましたが、その他の御尊像は動いた形跡もほとんど無く、無事でした。まさに「奇跡」という他に言葉が見つかりません。御神仏の御力に対する「畏敬の念」なのか、気が付けば全身に鳥肌が立っていました。

「間違いなく、これらの御尊像には魂が宿っているんだ…」

そう思わずにはいられませんでした。

堂内の被害状況を確認し終えると、ここに来てようやく屋外へ。

まず目に飛び込んだのは境内の十六重の石塔。前回の平成十九年の能登半島沖地震の際は塔頂部が落下しましたが、今回はなんと石塔の上部三分の一が崩落してしまいました。下に誰もいなかったのが不幸中の幸いです。

境内をぐるりと回って被害状況を確認したのですが、本堂の外壁の一部崩落や裏庭の石灯篭の倒壊以外に目立った被害はありませんでした。これもまた本当に奇跡としか言いようがないのですが、檀信徒の皆さまのお墓も、僅かに二基が倒れていた以外は、墓石のズレ等の軽微な被害で済みました。

構造的に一番心配だった鐘撞堂も、建物に若干の歪みが生じた以外、目立った被害は有りませんでした。

それから町内の現状を確認するため、走って参道を降りて県道二号線に向かいましたが、そこから見える景色には特段変化が無く、この時点では、まさか能登地方が壊滅的な被害を被っているとは夢にも思いませんでした。

お寺に戻ってから、思い出したように生活インフラの点検をすると、電気や通信は問題なかったのですが、残念ながら水道が完全に断水していました。

しかし、三年前の掘削以来、飲料用水として日常的に使用している井戸には特段の異常は無く、一時的に水が白濁したものの、徐々に透明さを取り戻し、通常通り飲用出来ました。これも本当に有難かったです。

あの地震から一か月。

それぞれに、様々な想いを胸に過ごされたことと思います。私自身、一日でも早くお寺を元通りにしようと、がむしゃらに奔走している内に、いつの間にか二月を迎えていた、というのが正直な感想です。

いまだに余震が続いております。

奥能登を中心に、たくさんの方々が被災され、自宅が罹災し、一時避難、二次避難で地元を離れることを余儀なくされております。

その結果として、奥能登からの人口流出が急速に進んでいます。

ニュースで被災地の現状を知り、また自らの足で現地に赴くたびに「能登はどうなってしまうのだろうか…」という言いようのない不安に襲われます。

控えめに言っても、正直なところ、全く先行きが見通せません。それでも「希望」だけは絶対に失ってなるものか、と思っております。比較的被害の少なかった中能登地方の住人として、能登復興へ向けた希望の下支えを少しでもお手伝い出来るよう、また当山が

【右上】倒れた仏具とは対照的に、ほとけさまは奇跡的に無事だった。

【右下】当山は立ち姿のほとけさまが多いが、こちらも無事だった。

【左上】本堂外壁の崩落から地震の揺れの激しさが分かる。

【左下】堂内各所で白壁の崩落やひび割れが確認された。

「心の拠り所」「祈りの場」として、
しっかりと機能して行けるよう、日々
怠ること無く頑張って参ります。

合言葉は、
『がんばろう、能登』

年中行事のご案内

annual event announcement

二月　四　日（日）午後一時　星祭祈祷会
三月十五日（金）午後五時　涅槃会
三月二十日（水）午後二時　春季彼岸会法要
三月二十二日（金）午後二時　稲荷大明神初午
四月二十一日（日）午後二時　日像上人法難会
四月二十二日（月）午後二時　稲荷大明神祭礼
五月　八　日（水）午前六時　釈尊降誕会

お誘い合わせの上、ご参詣ください

表紙の写真
「雪灯籠」（ゆきどうろう）

毎年１２月３１日の夜中、
当山では一年を締めくくる「除夜の鐘」が鳴り響きます。
そんな大晦日の境内に、ごく稀に出現することがある
「雪灯籠」。
揺らめくろうそくの火がなんとも幻想的。
ただ、作るのがとっても大変なので、出現するのは
ある程度の積雪と、副住職のやる気がある年だけ。
運よく見かけることが出来たら、翌年は良い１年間に
なりそうな予感。

【編集後記】

おかげさまで、寺報第五号（冬号）もどうにかこうにか「形」にすることができました。
このような表現をするのには、ちょっとした訳がありまして…。
実を申しますと、冬号の原稿自体は一月の時点で大方完成していました。
ところが、原稿を書き上げたは良いものの、私自身が震災の片付けや後始末に追われてしまい、推敲や印刷まで漕ぎつける事がついぞ叶わなかったのです。
そうこうしている内に、季節は冬が明けて春に、さらには夏を迎える頃になってしまいました。
「時期的にも、冬号を出すのは変だよなぁ…」
と、半ば諦めていたのですが、震災から半年が経ってから改めて発災直後に書いた文章を読み返してみると、そこには日常を取り戻す過程で徐々に薄れつつあった「あの日のリアリティ」が詰まっていました。
そこから心機一転。記憶を風化させないためにも、なんとか形に留めておかなければという想いで、ここまで漕ぎつけました。
　そんなこんなで、私の仕事の遅さと要領の悪さが招いた当然の報い、まさに因果応報ではありますが、半年遅れの冬号をどうかお手に取っていただけますと、編集者として喜ばしい限りです。

常在山本土寺寺報『常在霊鷲山 Vol.5』
発行所 常在山本土寺　編集 法花堂正匡
〒929-1601
石川県鹿島郡中能登町西馬場ユ部三番地
電話　0767-72-2235
FAX　0767-72-2281
ホームページ
https://www.jozaisan.org